

会報

第 5 号
2000. 11. 30
新潟大学
理学部同窓会

新潟大学創立五十周年記念 祝賀会での挨拶

(前) 同窓会長 渡辺昌吾

我が母校は赫々たる歴史を刻み、創立五十周年を迎えました。この栄ある式典に出席できる幸運に巡りあったことを、心から感謝申し上げます。

私は理学部第一回卒業生であります。僭越ながら各学部を代表してお祝いの言葉を申し述べる栄誉を与えられましたことは、私が一回生であり、母校の草創期・発展期に学生として、あるいは同窓生としていささか母校と係わりを持ってきたからだと思います。また、古希を迎える年に免じて花を持たせて頂いたからだと思います。

私達第一回生は昭和二十四年に入学いたしました。古橋広之進前 I O C 委員が、全米水上選手権大

会自由形三種目で世界新記録を樹立し、日本中が沸き、「フジヤマのトビウオ」なる言葉が流行した年であります。

思い出おすに、草創期の新潟大学は、人文・理学・教育・農学・工学・医学の六学部から成り、キャンパスは新潟・長岡・高田・新発田の四市に分散、校舎も本部を含め八ヶ所に分かれて建てていたかと思えます。その為「タコ足大学」という異名を拜しておりました。「タコ足」は何等負のイメージを感じるものではありませんでした。戦中の規制と戦後の耐乏の生活を体験してきた者にとって、大学で自由に学問できること自体、何にもまして幸であったのであります。仲間達はよく勉強しました。心

を込めて勉強することは、自分の知識を増大させてくれるだけでなく、それがやがてより高い文化を自分の後に引き継ぐのだとの思いをもっていたようであります。仲間達はよく未来を語り合いました。当時全国的にできた国民的酒場「トリス・バー」で友と過した時間は忘れられません。そして仲間達は、技術の進歩や文明の進展に敏感でした。私は東北大西沢潤一先生が世界にさががけ pin ダイオードを開発したこと、後のソニーが世界初のテープレコーダ「G」型を発売したことを知り、大変興奮したことを覚えています。時代は下って昭和三十七年、新潟日報が特集「新大に灯をともし」を十七回にわたって連載しました。この頃から、大学関係者の中で、各学部間の緊密な連携の上に立った名実ともにふさわしい総合大学の実現が論じ始められたようであります。『新潟大学二十五史』のはしがきに、当時の学長北村四郎先生が「これまでの大学は、分散した各学部を新潟に統合するため、各位の努力でありました」と統合への苦難を語っておられます。思うに、母校草創からの半世紀は、正に新キャンパスで教育と学際的研究に力を入れ、その成果を内外に発信することを旨とす関係

者の情熱の歴史でもあったと思うのであります。

時代は更に進みます。現在、新潟大学は実に十学部、大学院八研究科を数え、その他附属研究所、学内共同教育研究施設等を擁する文理両面に調和のとれた総合大学に躍進いたしました。外国人留学生三十六ヶ国二百五十五名、大学間協定六ヶ国九大学、部局間協定

異人池(こ)に望む 新潟カトリック教会

一九九九年六月一日、記念祝賀会が「ホテル新潟」で各界多数の方々が出席されて盛大に挙行されました。そのときの祝辞の原稿が入手できました。渡辺氏が新潟大学に寄せる卒業生としての思いがにじんでいるものと思い再録しました。渡辺氏は、この頃から理学部同窓会々長の職を譲ろうと考えておられたようですが、引き継ぎの手續が済まないうちに、今年二〇〇〇(平成十二)年三月逝去されました。同窓会としても、葬儀に際し花を供え弔意を表わし、多数の会員も会葬されました。

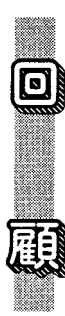


昔、西大畑校舎からみた風景
旧制新潟高校創立八十周年記念に、新潟大学医学部教授(故人)植木幸明先生の令夫人、須美子さんが製作された版画です。

(前ページから)

十二ヶ国三十三学部。特色ある学
究を深め、地方文化の中核だけ
なく、国際交流にも比類なき業績
を上げております。同窓の一人と
して誠に愉しく、また誇らしく思
うのであります。

「自分を自分自身の上になだけ築
いた存在は基盤を失う」とは独逸
の哲学者ヤスパースの教えであり
ます。今や、日本が世界のために
何か行うことを世界の人は息を



顧

新大に赴任した頃

の思い出

新潟大学名誉教授(数学)

金子哲夫



母校の巻高校での九年間の勤務
のち、昭和三十年に旧制高校で
の恩師の河野伊三郎先生のお誘い
により、数学科の助手に採用して
いただきました。赴任する前に、
河野先生は東京都内の大学へ転任
され、青木、沢木、市原、本間、

凝らして見つめております。新潟
大学が、集い寄る若者を育むと同
時に、これからも高い理想のもと
で、日本そして世界のために貢献
下さることを切に希望するのであ
ります。

最後になりましたが、私達同窓
生六万三千名、微力ではありますが
が力を合わせて可能な限り母校の
ために力を尽くさせて頂くことを
申し上げ、お祝いの言葉とさせて
頂きます。

水沢の五人の先生方が発足から六
年たった数学教室の研究教育態勢
を更に整備しようと全員で協力し
て居られたときで、新参の私も暖
かく迎えていただきました。今当
時のことを振り返って、特に有難
かったのは次の二点です。

一つは講義のことですが、昭和
十八年に東大に入学して、高名な
先生方の講義が早く開きたいと張
り切って登校したのに、長時間遅
れて来られる先生があり、休講も
多かったのです、研究に比して教育
を軽んじておられるのではないかと
いう疑念を持ちました。それで
新大に赴任したら、休講はしない、
講義の時間には遅れずに行き、受
講者全員に解かってもらえるよう
丁寧な講義をしようということを目
標にしていました。実際に赴任

してみますと、五人の先輩の方々
は皆非常に熱心に講義をしておら
れ、それを見習うことで自然と目
標を達成できたように思います。
また定年までの三十四年間風邪も
あまりひかず殆んど休講をしない
です。これは幸いです。

いま一つの点は研究面ですが、
高校での九年間は教育に専念して
いましたので、迎えてくださる先
生方について行けるか不安があり
ましたが、教室では新しい研究態
勢を築くために、週一回青木先生
を中心にトポロジーのゼミを開く
など、いろいろと工夫をしておら
れましたので、私も半分学生に戻っ
たような気分で、楽しく研究生生活
に浴び込むことが出来ました。

最後に確率論を研究のテーマに
選んだ理由を述べておきます。私
は複雑な式の計算は苦手なので、
才能という点からいうと確率論に
は向かないのかもしれないけれど、
人一倍興味を持っていました。世
界の歴史でも人の一生でも重大な
局面では、殆どどの場合成り行き
は確率論的な偶然に支配されてい
るような気がします。私の平凡な
一生でも、例えば、数学科の助手
の話は最初東京に居た友人の方に
あったのですが、彼は東京での生
活に愛着が有って受けなかったの
で、第二候補の私の所に来たとい

うことが後で分かりました。もし
彼が受けていれば、彼の人生も又
私の人生も、かなり今とは違って
いたと思います。また彼は返事を
するについていろいろと考えたよ
うですから、どちらの選択にもか
かりの確率が有ったものと思いま
す。

西大畑時代を想う

新潟大学名誉教授(化学)

清水隆八



昭和二十八年十月九州大学から

化学科講師として赴任して来た。
着任当日庶務係長が駅まで出迎え
に、事務室では化学科主任完戸教
授が待つておられ長旅をねぎらっ
て下さった。大学卒業後三年余の
こんな若僧をと感激し、温かい人
間味を理学部に感じながら西大畑
時代への第一歩を踏み出した。
着任した当時化学科には無機分
析化学、有機化学、物理化学があ
り、先生方は松井(有)、完戸
(物)、小山(無)、中原(有)、外
林(無)、菅野(物)六名で、有
機化学担当として私に加わった。
外林・菅野両先輩は年が近く何で

も教わり苦労しなかった。創設期
のあわただしさは無く軌道に乗っ
ていた。

実験台と机しかない居室を有り
合わせ物で実験室に仕立て上げ、
周囲を見渡すと利用できる機器は
皆無であった。多分事情はどのも
同じだったと思う。有機合成研究
には不可欠の元素分析は九大の先
輩に頼みこんだ。結果は早くて三
週間後。地方大学の宿命と自ら慰
め自立への道を探した。価値ある
図書はバイルシュタインのみで、
文献調査は医学部の図書館を利用
するはかなかった。しかし、新し
い図書購入については、きびしい
予算の中にも思い切った割当てが
なされてあった。

やがて地方大学にも国の特別補
助が滲透し始め、赤外線分光光度
計(IR、昭和三十三年)、核磁
気共鳴装置(四十三)が全学共同
利用機器として購入され、又簡易
型IR(三十三)、元素分析装置
(三十七)が化学科に備え付けら
れ研究環境は大きく改善された。
しかし、校費増は微々たるもので
あった。物は買ったが置く場所が
無い、狭い古しい、将来のため
思い切っての住宅事情にも似た
悩みが統合移転への推進力となっ
たように思う。
急逝された松井教授の後に深田

教授が着任された。先生は山野歩
きが好きて、夏休みには院生も含
め講座全員で二・三日の旅行を楽
しんだ。青空と緑に囲まれてのコ
ーヒータムは最高であった。新入
生歓迎の化学科全員での遠足、教

リレー会員 だより

六花寮での四年間

(化学11回 昭和38年卒)

半田 進



このたび自然環境科学科の石塚
教授から原稿依頼を頂いたとき、
先ず思い出したのが青春時代を過
ごした六花寮での四年間です。
高校も寮生活でしたので、当然
のごとく六花寮に入りました。
変化の少ない寮生活での楽しみ
は、寮祭など寮の行事と、その後
で街に繰り出して騒ぐストームで
す。近く的女子寮は勿論のこと、
知事公舎にストームをかけたこと
もありました。また、映画館の大

官職員对学生の野球、土曜午後の
テニス等思い出はつきない。
振り返ってみれば、西大畑時代
は移転前夜を除き結構楽しくやっ
ていたように思う。身の軽き若さ
のためものだったのだらうか。
きな看板を皆で持ちかえり、寮の
部屋の中を占領品で飾りたてる競
争をしたこともありましたが、時代
のせいかもしれません、今ほど
学生の人数は多くなく、新大生だ
けのせいもあって、皆さん大目に
見てくれたのでした。
特に思い出す出来事として夜間
弥彦山まで歩いたことがあげられ
ます。当日台風が接近しており、
大雨強風波浪注意報が出ている中
での出発でした。予想通り途中か
らは雨となり、道路沿いの神社の
境内や民家の軒下で雨宿りしなが
ら、なんとか翌朝全員無事に弥彦
山に到着することができました。
この時の難行と達成後の爽快感は
今でも折につけ思い出されます。
大学寮の良さは寮生の多様さに
あると言えます。たかが学生とは
言え、医学部も含め理科系・文科
系が入り交じり、人生論など毎晩
のように議論していました。
私は八人部屋と三人部屋の両方
を経験しましたが、大部屋の方が
好きでした。全員で金を出し合い

素麺を買ってきて洗面器で茹でて
食べたものです。また、夜になる
と塀を乗り越えラーメンを食べべ
に行きましたが、私の定番は肉無し
大盛り(百円?)でした。
いつ勉強していたのでした。
事実、卒研以外には勉学の思い出
は殆どありません。しかし、私の
今日あるのは、自然科学的な思考
方法と多様な人達との交流方法を
身に着けることができた西大畑、
特に六花寮での四年間にあるよう
に思います。
この八月花王(勲)を定年退職しま
したが、研究・管理・購買・開発・
教育・販売と多くの部門に携わり、
お陰様でそれなりに貢献することが
できたと自負しています。
(現在、(勲)油脂工業会館勤務中)



事務局からのお願い

住所や職業・勤務先を変更
した場合は、早急に各学科同
窓会事務局または学部同窓会
事務局(学科名も)宛連絡し
て下さい。

退官された先生

田中謙輔先生(数学科)
在職期間
昭和43年4月〜平成11年3月

池田清美先生(物理学科)
在職期間
昭和45年5月〜平成11年3月

古澤 昭先生(物理学科)
在職期間
昭和38年10月〜平成11年3月

岡本能樹先生(化学科)
在職期間
平成7年10月〜平成11年3月

渡部 剛先生(数学科)
在職期間
昭和37年4月〜平成12年3月

金子哲夫先生(数学科)
在職期間
昭和43年10月〜平成12年3月

武田 宏先生(教養部・生物学科)
在職期間
昭和40年10月〜平成12年3月

長谷川美行先生
(教養部・地質科学科)
在職期間
昭和39年6月〜平成12年3月

辞職された先生

古橋勝久先生(生物学科)
在職期間
昭和51年5月〜平成12年3月

加藤辰巳先生(自然環境科学科)
在職期間
平成7年4月〜平成11年7月

原口 昭先生(自然環境科学科)
在職期間
平成10年9月〜平成12年5月

叙勲の栄に 浴された先生

金子哲夫先生(数学科)
勲三等旭日中綬章
平成12年4月29日

亡くなられ、死 亡者叙勲の栄に 浴された先生

小林 武先生(化学科)
従三位 平成11年3月7日

野本森萬先生(物理学科)
正四位 平成11年10月16日

田中謙輔先生(数学科)
正四位勲三等旭日中綬章
平成12年6月18日

大学から (国際化の一例)

外国籍の先生を紹介します。

Andreas Werner Donni

1960年10月スイス生 (40歳)

1987. 4. スイス連邦工科大学卒 (数・物)

1991. 5. スイス連邦工科大学博士課程終了

1991. 5. ph.D. (スイス連邦工科大学)

1996. 8. 来日 科学技術庁東北大学を経て

1997. 11. 新潟大学助教授

日本物理学会、Swiss Society for Neutron Scatteringに所属し多数の論文を発表。

固体物理学における相転移、磁性と超伝導が専門。

左にメッセージを頂きました。ETHとはドイツ語でEidgenossische Technische Hochschule Zurichの頭文字、英語ではFederal Institute of Technology。

「首都圏同窓会」たより

第15回新潟大

学首都圏同窓会

が去る7月22日

に新宿エステッ

ク情報ビルで開

催され、約50名

の同窓生の方々

が出席されました。

当日は、サイ

エンスセミナー

で始まり、各界

で活躍の五氏の方から、次のこ

高話を伺いました。

「江刺追文発祥と新潟との関わり」

数 昭39卒 伊豆野康弘氏

「細腕ふるさと体験」

物 昭37卒 中川 哲昌氏

「IT産業を支える材料の研究動向」

化 昭45卒 亀原 伸男氏

「生体防御とサイトカイン」

生昭55・院昭58卒 信田 庸三氏

「土木重要構造物の決壊事例の紹

介」 地 昭38卒 永木 明世氏

サイエンスセミナーの後、総会を行い、引き続き別会場で、懇親会が行われました。

懇親会には、出席者全員が参加され、ジョッキを片手に夜の更けるのを忘れて、和やかに旧交を暖めました。

(追伸)

新潟大学理学部首都圏同窓会の

ホームページが開設されました。

<http://www.inetinc.co.jp/DOSOKA.htm>

すべて小文字にしてもアクセス

できるようです。ご利用下さい。

教育界そして大学も変化を強いられるようです。新潟大学の理念は「知の探究」ですが、教育研究の高度化・個性化・組織運営の活性化・地域拠点大学としての発展・国際化・市民への公開と様々な課題があります。先般、荒川学長が各学部の同窓会会長らと懇談し、同窓会とのパイプを太くし協力関係を強めたい意向を伝えられました。本会組織の強化も必要になるわけです。

同窓会総会の御案内

日時/平成十三年二月十一日(日) 十一時三十分から

場所/イタリア軒

新潟市西堀通七(☎02512241511)

会費/8000円

総会后懇親会を行います。

申込/左記にFAXまたは電話で一月末日までにお申し込み下さい。

当日受付も行います。

数 学 (吉川益男 TEL025012218606)

物 理 (遠藤昭一 FAX025123115823)

化 学 (植木幹雄 FAX025124718866)

生 物 (南雲照三 FAX025126710591)

地 鉢・地質 (若林茂敬 TEL025126012167)

環 境 (石塚紀夫 FAX025126217536)

議題/同窓会長の選出 会則の改正変更 他

皆さんの参加をお待ちしています。理学部長も御出席の予定です。

Early history of ETH

by Andreas Dönni

For the Japanese people living in Niigata it was fortunate that 51 years ago Niigata university opened its doors in 1949. I have studied physics in Switzerland at the Federal Institute of Technology Zürich or - to give the university its German acronym - the ETH. The history of ETH goes almost one century further back to the year 1854.

In the 19th century the industrialisation in Europe brought an enormous need of qualified technicians, in particular in chemistry and electrical engineering. Germany, a neighbour country of Switzerland, recognised that early and founded technical high schools already at the beginning of the 19th century. The education of science and technology was pushed and a surplus of qualified persons was produced for the industry. As a result, part of the German industry became world leading: In the year 1900, the export of electrotechnical products of Germany was more than three times higher than that of the biggest competitor USA and 90% of the world production of synthetic dye was produced in German factories.

This development in Germany became more and more a threat to the economy of Switzerland. Therefore in the year 1854, half a century after Germany, the Swiss government decided to found its own technical high school, the ETH. The chemical industry in Basel is a good example to demonstrate the impact of the opening of ETH on the economy in Switzerland. Around 1860 the founders of the factories in Basel were emigrants from France. They knew how to produce a few synthetic textile colours and used the blind trial and error method to search for shades of these colours. Already ten years later the existence of these factories was threatened by the competition of German factories which performed systematic industry research. That was the time when graduates from ETH took control of the factories in Basel. Following the German model they introduced systematic industry research and soon the number of products developed in own laboratories sharply increased. Despite tough international competition, the chemical companies in Basel, like Sandoz, prospered for a very long time until the year 1996 when the name Sandoz finally disappeared in the merger with Ciba, another company of Basel, to become one new company named Novartis.

The population of Zürich, the location of ETH, is comparable to that of Niigata. For the future of Niigata university I wish that compared to the first 50 years of its history, the second 50 years may bring more priority and financial support from the Japanese government. For the Japanese people leaving in Niigata it will be fortunate if the quality of education at Niigata university can further increase and help that the location Niigata will become more attractive for Japanese companies.